

## 資料紹介

## 智的小説刊行会設立の理由

## 解題

若き日の乱歩は、さまざまな職を転々としていた。大正九年には団子坂で古本屋を営んでいた。のちに乱歩が活躍することになる雑誌「新青年」はこの年に創刊されていたが、まだ乱歩は注目していなかった。

鳥羽造船所に勤務していた時期の友人、井上勝喜が古本屋に転がり込んでいた。井上は探偵小説好きで、乱歩と探偵小説の筋を話し合ったりしていた。そこから、探偵小説を書いて売ること考えたのだった。

三津木春影の「呉田博士」は、コナン・ドイルやオーステイン・フリーマ

ンの翻訳・翻案だった。これを出版していた中興館書店に乱歩は手紙を出した。探偵小説の出版を打診したのである。出版にかかる費用が暴騰していた時期でもあったし、乱歩は作品を見せた訳でもなかったため、この提案は断られてしまう。

そこで乱歩は、自ら「智的小説刊行会」を設立することにした。会費を徴収して、出版の費用に充てるという計画である。刊行するのは「グロテスク」と題した雑誌である。

内容見本となるパンフレットを作製した。これは乱歩のスクラップブック『貼雑年譜』に貼付してある。予告に「石

塊の秘密」江戸川藍峯作、とある。のちに「一枚の切符」として発表されるものである。

乱歩の回想録『探偵小説四十年』には「智的小説刊行会」の節がある。ここにその経緯が説明されている。さらにこの内容見本にある「智的小説刊行会設立の理由」が引用されている。

探偵小説を愛する我々が、発表の場としてこの雑誌を刊行して行こうという意気込みが書かれている。

『探偵小説四十年』では「面白そうな個所を抜いて見ると、」と紹介されている。いくつかの部分に「(中略)」となっていたり、カッコで概要を説明したりしているところもある。省かれた部分は、主に作品などの具体例である。「グロテスク」は、これまでに紹介してきた小説草稿などと同じく、

「EXTRAORDINARY」と書かれた大形の封筒に保存されていた。ここに紹介するのは、その「智的小説刊行会設立の理由」全文である。

乱歩にはこれ以前に『奇譚』と題された手製の書籍がある。これは当時の乱歩がまとめた、探偵小説の紹介本である。古本屋で販売しようとしたが、買い手がなかったという。この『奇譚』に書かれているものが下敷きになって、「設立の理由」になっていると言えるだろう。

すでに引用されていた部分からはわからない、乱歩が発点にしていた具体的な作品群をここに見ることができるとある意味で乱歩の原点を要約した文書ということが出来る。

落合教幸（立教大学江戸川乱歩記念  
大衆文化研究センター学術調査員）

## 智的小説刊行会設立の理由

我等は好奇の小説就中探偵小説を極愛するものの一團です。世間では探偵小説其他好奇的な小説をセンセイショナルと称して、一概に下品な劣等な

のにして居る様ですが、我々は左様な見解を持つてゐる人々こそ低能な生半可だと思ひます。

純文学が人情の機微を寫し出すもの

であれば、探偵小説などは智識の機微を寫し出すものです。一は人情の感じて未だ云ひ得ざる所を深く細く云ひ現はす所に妙があると同じ様に、一は人智の想像し得る限りにして未だ常人の思ひ及ばざることを仕組むが故に妙なのであります。文学の要件を何所に求むるかは大いに問題の存する所ですが、我々は作品に一脉の魅力あることをその一大要件と信じ度く思ひます。魅力の立場から云へば、好奇小説も亦立派に存在の價値を有します。

たしかにこの魅力の点が重大だと思ひます。その証據には、大文学者と云はれ、狭い見方から見る時は勿論好奇小説を軽蔑すべき立場に居る人々が、意外にも探偵小説などに非常の興味を持つてゐることがあります。例へばイブセンは生前他人の著書は余り讀まなかつた人ですが探偵小説のみは各國のものをも廣く蒐集して愛讀して居つたと云ひます。又純文学をして價値ある作品のプロットに探偵的興味を取り入れたものは獨りドストエフスキイのカラマゾフのみではありません。我國の大作家でも谷崎潤一郎氏の如きはポーやドイルの探偵小説を可也好んで居られるらしく、「ゴールドバッグ」などは時々引合ひに出されます。同氏の「白晝鬼

語」はその好例です。又芥川龍之介氏も最近の新小説に於て「未定稿」と題してドイル張りの純探偵小説を發表して居ります。

好奇小説が如何に人を引きつけるものであるかはその賣れ行きで分ります。コナンドイルのシャーロックホームズが如何に世界的名聲を有するかモリスルブランやガストンルルウの小説が如何に各國に翻譯せられてゐるか、これ丈で充分その民衆的價値が分ります。我國でも涙香物と称らるるガポリオウボアゴベの探偵小説が如何に版を重ねたか、ドイルの小説が幾度重複して翻譯せられたかをご覧下さい。[その一例はドイルの「A Scandal in Bohemia」の如きは「獨身華族」(本間久四郎訳)「殺人俱樂部」(森嶼山訳)「女優イレネア・アドラ」(某氏訳)「シヤールックホームズ」(加藤朝鳥訳)「武俠世界」中の「大奈翁の王冠」(押川春浪翻譯)の五つもの訳が出て居ります]つまり斯様に歓迎せられるだけの魅力を何所かに持つてゐるのです。何か人性にしつくりあてはまるものがあるのです。考へ物やなぞ〜が古今東西いつも絶えぬのは矢張りこの作用だと思ひます。人は感情方面に於て泣いたり、笑つたり、怒つたり、同情した

りする慾望を持つてゐると同様に、理性の方面に於てもすばらしい想像とか、判断とかに接したい慾望を持つて居ります。純文学に於てユーモアの尊重せられるのはこれに似た心理から發してゐるのではないかと思はれます。

世紀末の心理は非現実のローマンスを排して端的に讀者の經驗に突き入る様な現実主義を歓迎する様になつたと云ひますが、これと反對に我々は又一方、余りに絶間なき現実に面接することの煩はしき苦しんで居ります。せめては文学に於ても空想の天地、非現実のものの中に遊び度いといふ希望があります。ネオ、ロマンティズムが如何なる理由によつて提唱せらるゝかは姑く措いても我々はこの意味によつてロマンティズムを懐しみます。そして昔を顧みる我々の前に、感情的ロマンティズムにスコットの「湖上の美人」があると同一程度で、理性的乃至智的ロマンティズムにはトーマス・モアアのユートピヤがあり、ジュール・ベルヌやウエルスの科学小説があるのです。

我々はこう云ふ方面に美を尋ねて行かうと思ひます。ベルトランド・ラッセルは数学に美が在ると云ひました。我々が探偵小説や科学小説に美を求め

るのにはそれと似た理由があります。つまり我々は理性の美、判断力の美、智識の美、聰明の美を求めて行かうといふのです。そこで我々の作品を「智的小説」と唱へることになるのです。

左に我々が智的小説のカテゴリに入れて居る作家の重なるものを上げ、我々の考を明にし度いと思ひます。先づ我々の守り神はエドガア・アラン・ポーです。彼の神秘主義、悪魔主義も勿論大いに尊重すべきですが、智的方面に於ては主として探偵小説 (The Murder in the Rue Morgue, The Mystery of Marie Rogêt, The Purloined Letter など) 科学小説 (The Sphinx, Thou art the man など) 秘密小説 (The Gold Bug など) 探検小説 (The Balloon hoax など) などです。その他、

△探偵小説 Boissgobey, Gaboriau, Doyle, Freeman, A.K.Green, Leblanc, Leroux.  
△秘密小説 Stevenson, Bengison, Dumas.

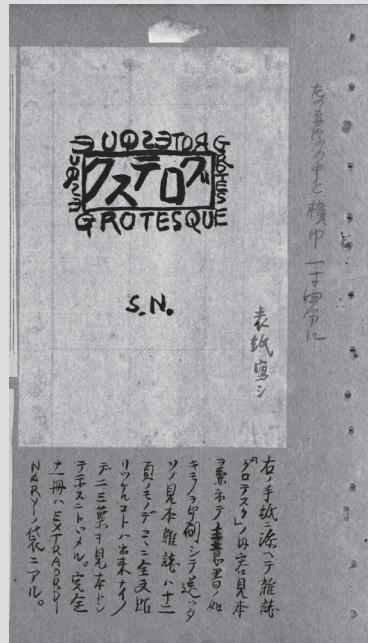
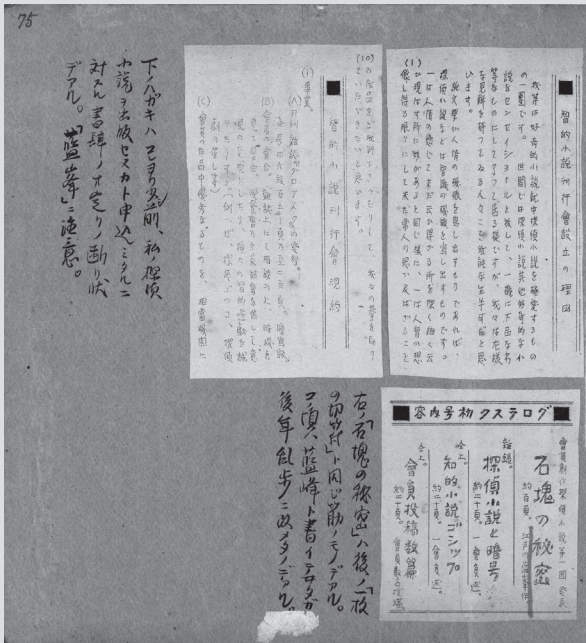
△科学小説 Verne, Wells.  
△探検小説 Haggard.  
等は夫々の項目に於ける代表者とも見らるべき人々です。

我々はあらゆる此の種の小説を讀んで、了ひ、もつと讀みたたく思つて絶えず新刊書に注意して居りますが、大抵は児童に類する幼稚なもの計りなのでいつも失望して居ります。日本人の作品としては故押川春浪氏のものが多いが多少智的小説を帯びてゐますが少年對手の讀物が多いので皆幼稚の域を脱しません。近頃は又岡本綺堂氏や松居松葉氏の捕物帳といった様なものが出てゐますが、共に題材の奇と文章の甘味の外に智的興味といふ様なものはありません。髪の毛一本から大犯罪を演繹する体の理論的面白味がありません。故三津木春影氏の「具田博士」などもありますが、あれは皆フリーマンとドイルの翻案です。

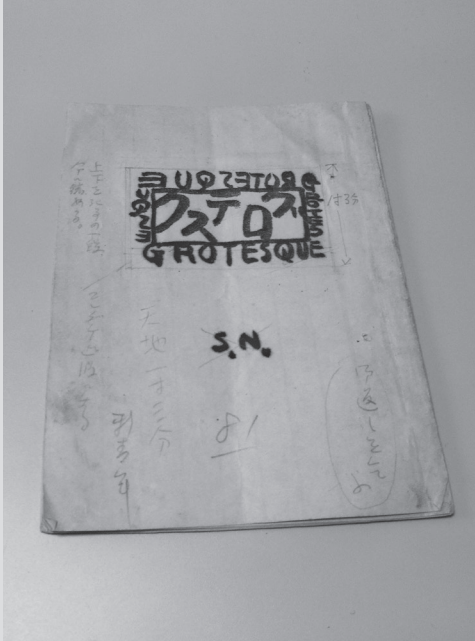
そこで、他人に待つてゐるよりも、自分で一つ作つて見やうではないかといふことになつたのです。それも賣らん為の原稿では俗受けを考へなければならぬので面白くない。世には我々と同様の感を抱いてゐる人々も多少はあること、思ふから、その人々と一緒になつて研究的に商賣から離れた作品を見せ合ひ、論じ合ふ會を拵え様ではないか。その機関として同人雜誌風のものを出すのだが、始めは數も少いことだから、少し高くつくけれども、贍

寫版摺りにして月一回位、雜誌風のものを出し、毎号一つづつ會員の小説を載せて行き、會員相互に批評し合ふことにしたらどうだらうといふ相談が纏つて、茲に智的小説刊行會といふものが出来たのです。會員は一人でも多い方が費用も省け面白くもあるのですから、どうか貴下もご入會下さつて、作品をご発表下さつたり、他の作品をご批判下さつたりして、我々の舉を助けていたゞきたいと思ひます。

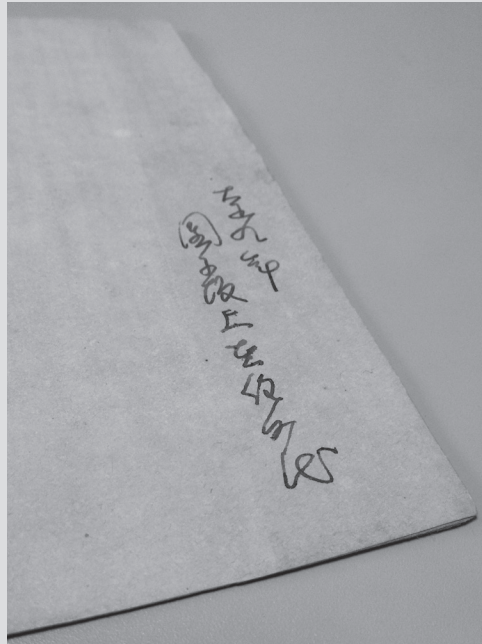
「グロテスク」(「貼雜年譜」より)



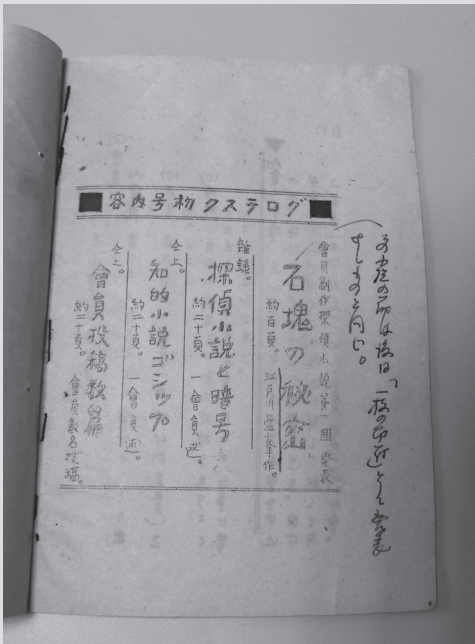




表紙



裏表紙「大正九年団子坂上時代」



奥付「この小説の筋は「一枚の切符」  
として発表せしものと同じ。」